

窓と玄関

- 暮らしのアイコン -

東京藝術大学大学院 美術研究科

博士後期課程 美術専攻

日本画研究領域

学籍番号 1321902

勝又 優

論文要旨

私にとって絵画制作は、日々の暮らしの記録としての意味合いが多分に含まれており、普段過ごしている日常生活の中で実際に見た景色の中から、心を惹かれ、記憶に留めておきたいと感じたものを絵画として残してきた。これまでの自制作では、記録としての目的以外に一貫した主題などは設けておらず、題材にしてきたモチーフは人物、植物、動物、建物など様々である。特定のモチーフを定めて制作してきたつもりはなかったが、本論文執筆を機に自作品を振り返ってみると、窓辺や玄関先を描いた作品が多い。そのすべてが、知らない他人の家や、入ったことのない小さな店舗だったことに気付く。

これまでの記録的な自制作に、どこか物足りなさや行き詰まりの様なものを覚えていた自身にとって、窓と玄関に惹かれる理由を解明することが、今後の制作において重要な意味を持つのではないかと期待した。本論文では、自身の過去の暮らしや実体験を振り返り、窓や玄関、日常生活を題材とした自作品と他作品とを比較することで、その魅力の正体について考察した。

本論文は以下の3章からなる。

第1章 窓と玄関

第1節「内側」では、外側から見た窓と玄関の見えない部分、その内側について考察した。窓や玄関の内側にあるもの、それらが住人の分身とも言える大切なものであることを述べた。そして窓や扉といった住まいの開口部は、いつの時代も暮らしの中で人の気配が集中する場所であることを、過去の美術作品から解説した。

第2節「外側」では、まずファサードについて考察した。ファサードとは、建物を正面から見た外観のことを指す。それを街路から見ることで、外側からでも感じ取れる暮らしの気配があることを述べた。また窓と玄関の持つ柔らかな秘匿性が、内側の世界を想像させ、あるいは自身の過去を想起させる作用があることを述べた。

第3節「原体験」では、自身の生家がある静岡での暮らしと、東京での一人暮らしの経験が影響し、窓や玄関に惹かれるようになった経緯を述べた。また自作品に見られる正面性が境界の役割を果たし、自制作にとって欠かせないものであることを述べた。

第2章 暮らしのアイコン

第1節「多様性」では、海外と日本、それぞれの地域に見られる暮らし方や、窓と玄関に見られる特徴の違いを見た。そして統一感ある海外の街並みや日本の伝統建築の街並みに含まれる窓と玄関は、地域性や歴史、伝統を色濃く反映していることを述べた。対照的に、日本の現代建築の外観に含まれる窓と玄関は、地域性や歴史的な系譜が少ない分、作り手や住人の意思が反映されやすく、個人を象徴していることを述べた。

第2節「絵画的性」では、窓や扉を題材にした代表的な作品と、自作品とを比較した。内側から描くか、外側から描くか、都会か田舎か、繋がるためか、閉ざすためか、作家ごとに込める想いもまた様々である。窓と玄関の魅力、描く意義について再考した。

第3章 街より一窓と玄関

第1節 「読む絵画」では、日本の現代建築の窓や玄関は詩的であり、読む絵画として鑑賞価値があることを述べた。また窓や玄関の持つフレームの効果で枠外の存在が示唆され、イメージの世界が助長されていることを述べた。

第2節 「提出作品」では、読む絵画の実践として制作した提出作品「街より一窓と玄関一」の絵画的試みや構成モチーフについて解説した。

おわりにで、本論のまとめと展望を述べ結びとした。